四五一
二一四
六四五一

文部省編纂

飜刻 小學讀本 巻三

明治七年八月改正

積玉圃鉛鐫

大日本教育會書籍館
第四室
四函 五架 号 四册

田中義廉　編輯
那珂通高　校正

第六

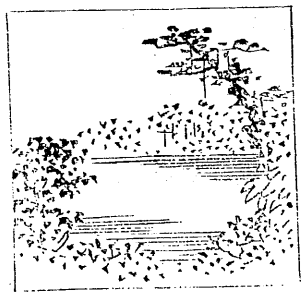
水ハ動物植物ノ生活ニシテ地球上尤要用ノモノナリ水ナキトキハ萬物生育スルヿヲ得ス

水に止水流水の別あり池水湖水を止水といひ河水を流水といふ

湖水ハ陸地全く四面を環り中窪なる地に滯れるなり

河水とハ山間の谿谷より湧き出て、海に注ぐをいふ

此圖ハ林中の湖なり此水ハ陸地全く四面を圍みたるゆゑに流れ去ることなし



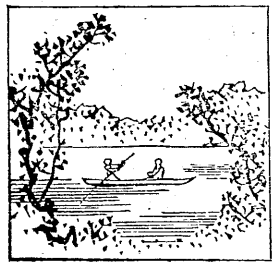
今ハ夏日なりや又冬日なりや木葉の茂りたるを以て夏日なることを知る○冬日ハ總て木葉なきか○然り多く木葉なし唯松栢の類のみ葉あり○野草ハ冬日にても生ずるか○否生ずることなし

汝ハ林中に鳥あり又水中に魚ありと思ふや○必これあらん唯明に見ることを得ざるのみなり

林間に湛へたる水上に數多の水鳥ありて游泳せり水鳥ハ閑靜なるを好むものゆへ其浮べる處ハ景色甚幽邃なり

此圖も亦林中の湖なりこれハ前に示したる圖の湖と同じきか○然り同じ湖なれども我が見る所に因りて異れるなり

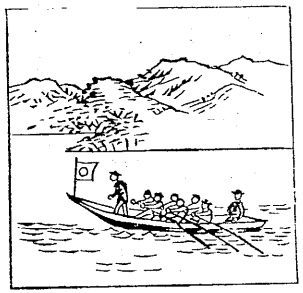
今湖上に浮べる舟あり舟中に多くの人を載せたりこの人の携へたる長きものハ何なりやこれハ水棹にて舟を動かす具なり○此舟ハ何れ



の方へ行くやこれハ左の方に行くなり

此舟ハ前の舟と同じきか○否同じからず此舟ハ前の舟より大にして八人を載せたり

何如にして舟を進むるや○此中六人ハ携へたる擢を操りて舟を進むるなり○舟ハ櫂を操りたる人の何れの方へ行くぞといふに其後の方に行くなり舟の艫と舳に居る人ハ何を爲るぞといふに先の人ハ水前を測り後の人ハ舵を操れるなり

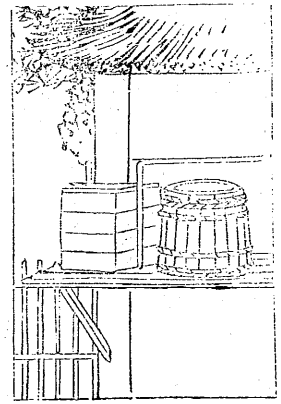


第二

此圖ハ蜜蜂なり蜜蜂の蜜を巣の中に貯ふるを見よ其勤め實に容易ならず

天地の間に生を稟けたるものゝ蟲すらも猶かくの如し況や人と生れたる者を余今汝等に蜜蜂の蜜を貯ふる狀を語るべし

此蜂には髮筋の如き舌あり此舌を花の中に入れて蜜を吸取るなり



此蜂夏の際ゝ旭の昇るを待ちて巣の中より飛出種々の花を尋ねて其中より力の及ぶ限りゝ蜜を吸取りて歸れり

其除は何如なる暑き日にも怠らず日々飛去りてゝ飛回り夏の永き日を一刻の時間も徒に費すことなく蜜を巣の中に積置ゆゑに冬に至りて一種の花無き時にも食料に乏しきことなし」

此蜂にゝ巣毎に必秀でゝ大なる蜂ありてこれを蜂の王といふ又蜜奴とて蜜を取らざる蜂數頭あり此蜜奴をばかの能く勤むる蜂どもこれを逐出だして共に巣の中には棲まざるなり

汝等も幼時より日々勉め勵みて此蜂に聽ぢざるやう心がくべしもし怠惰にして其業を勉めざること此蜂奴の如くならば必世間の人に疎まれて遂にゝ與に交るものもなきに至るべし

第三

人と交るにゝ眞實を以てして決して虚言すべからず○衆人に對して親切に交り言ゝ必忠信を主とする時ゝ衆人も亦我を愛して其身も自幸福を得べし

汝ゝ虚言の惡しきことを知れりや○然り虚言の惡しき事ゝ屢これを聞けり

苟虚言する時ゝ人皆汝を棄てゝ顧ざるべし

此の如くなるときゝ何を以てか身の幸福を得べき

自其惡しきことを知りて虚言したる後ゝ汝の心に快きか○否快から

ず

然らば汝の心に惡しきことを知りたらば決してこれを犯すべからず

縱令人の見ざる所にても常に父母教師の面前と思ひて其行狀を慎むへしこれを獨を慎むといふなり

故に善良にして正直なる兒ハ神の助を得て其身の幸福を享ること疑無し

若又誤りて窓を破り書を汚し戸の鍵を失ひ机上に墨を翻せる時なぞハ父母教師の前に行き自其始末を訴て罪を謝すべし是唯に人を欺かざるのみならず亦自欺かざるなり

自欺かざらんことを欲せば決して虚言すべからず只此一事ハ到底善人となるべきの道なり

人と約してこれに背くハ不善の甚しきものなり必衆人の擯斥を免れ得ず故に一旦約したる言ハ務て正實に行ふべし苟信を朋友に失ハず縱令學術に通ずとも生涯身を立つること能ハざるべし

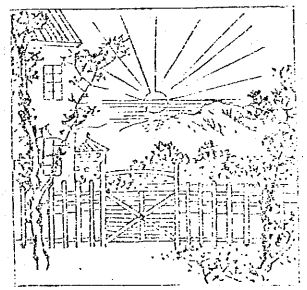
惡事ハ小なりといへども忽になすべからず其一念漸く長ずるときハ是非を明にし善惡を審にすること能ハざるに至るものなり人として是非善惡の心無き者あらざれば常に善に就き惡を去り是を行ひ非を拒き虚言せず約束に背かず其快からんことを求むべし心まことに快きを意を誠にすといふ此の如くなるときハ必衆人の敬愛を得て神の助を蒙り其身に大なる幸福を享るものなり

第四

夜將に明けんとする時雞先つ鳴く夜既に明くれば鳥雀鳴く

汝ハ寢所に在りて雀の鳴くを聞きしや此鳥ハ夜明けて後ハ眠ることあらず人としてハ鳥雀に劣るべからず故に鳥の聲を聞くときは直に

起き出づべし



神い霊間人々に日光を與へて其業をなすに便ならしむ然るに夜明けて後まで猶寢所に在るは神の惠を棄るなり故に汝等必夜明けぬれば直に起き出で、業に就くべしこれ身を立つるの初なり

幼稚のものい夙に起きて勉強し無益に時を費すことなければその習ひ性となり壯年の後業を勉むるにも倦怠の心を生ずることなし

夫神は必勤むる人にあらざれば妄に物を與へずして勤むれば物を與ふるものなれば身の勉強い幸福を生む母なりと知るべし

されば人々能く勉強して身の幸福を求むべし勤むれい必功あり惰れば必功なし今日勉めずとも明日ありと云ふことなかれ今年學ばずとも來年ありといふことなかれ光陰は矢の如し一度去りてい復還らず壯年に至りても一業一事を習ひ得たることもなく遂に貧窮困苦に陷るは皆自招くの禍なり

第五

二人の童子あり共に野に出で、樹陰に息へりこの地の野草灌木茂れるを以て氣候の夏なることを知る

一人い一卷の書を開きてこれを讀み又一人い坐して其文を聽くことを喜ぶに似たり我れ其聲を聞かざれども今其顏色を見て其心に喜べることを知れり○何によりて喜悅の心顏色に形はるゝや○微しく笑へる色あるを以て其喜悅の心あるを知れり

人ハ口を開かずとも其笑を含めるハ心に喜のあるを告ぐるが如し顔色ハ喜怒を人に知らしむる徴なればなり

凡衷に喜怒哀樂の情あれば如何にこれを隠さんとするとも顔色の徴ハ覆べからず

されば人に對してハ不平の心を懷かず親切に遇すべし何となればもし我心に毫も怒をふくみ又ハ不平の心あれば必顔色に形ハるゝ者なればなり其他或ハ不幸なるとき或ハ倦怠せるとき皆其心を顔色に形ハして人に知らしめざることなし

第六

凡世間にある人は貴きも賤きも父母より生まれざるハなし故に父母ハ我身の出で來し本なれば本を忘るまじきことなり況てや養育の恩山よりも高く海よりも深くして幼き時より晝夜艱難苦勞して抱き育てられたるをやされば深く其厚恩を思ひて孝順の心怠るべからず

子の父母につかへて孝順なるハ神より命じたる務なればこれを忘るべからず苟不孝の行あれば唯に人の憎を受くるのみならず必神の責を免れざるものなり

神は我に性命をさづけ又我を守りて幸福を與ふるものなれども神に代りて我を養育せしハ父母なりされば父母ハ神と同じく敬ひ尊び何事も逆ふことなきを孝順といふ

苟父母の命に逆ふことあれば神の責を受けて禍に罹るにより父母の誡ハわが身の及ばざる所を補ひ助くる所にして即神明の命なりと心得決して背くべからず

昔年一人の男子あり其人となり温順にして幼稚のときより兩親に孝行たぐひなきものなりき其家固り富めるにハあらざれども貧き人を

憐み凡て人に交るに信實なるゆゑに誰いふとなく此男子を善人と呼なせり幼き時ゝ近郷の家に僕たりしが夙に起きて一事一業も怠ることなく暇あるときゝ手習に心を盡し又好みて讀書算術を學びしゆゑ幾ばくならざるに利發の人となれり

主人より暇を與ふるときゝ己れの隨意に遊ふことなく必我家に歸りて父母の安否を問ひ終日膝下に居て事に從ひ父母の心を慰ることを勤とせり

主家を出でし後ゝ瑣細なる商をして渡世せしが人々此男子の正直なるを知て其物品を信じければ幾もなく稍豐になれり

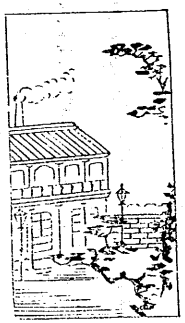
其後父を喪ひて母のみを養ひたるが晝夜怠なく介抱して其心に違ふことなく假にも母の厭嫌ふことをなさず常に善事を好みて慈愛の心禽獸草木まで及びければ其家次第に繁榮して富有の身となれりとぞ

宜なり孝ゝ萬善の本といへること此男子が生涯の正直慈惠學ゝずして此に至れる者皆孝より生ずる所なり

子の父母に仕へて孝順なるべきゝ天地自然の道にして須臾も忘るべからず然れとも外物の爲に心を奪ゝれて其道を失ふ者も少なからざれば常に其心を守り自然の道を忘るべからず今日太平の世に生れて妻子と與に鼓腹の樂を享くること何の幸かこれに如かんや故に宜しく國法を遵守して各其業を勤むべし凡人の子たるもの幼き時より親に事ふること此男子の如くせずばあるべからず

第七

此圖せる所ゝ田舍の富家なり其四面にゝ茂林花木ありて宅前の平地にゝ芝を栽たる好き景色の所あり



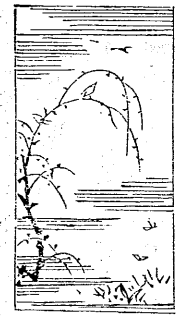
汝ゝこの家の圖を能く見て其樣を知るべし

此屋ゝ數多の棟に分れたり

屋の上に突き出でたるは烟筒なりこれハ煖室煖の烟を出だすために設たるなり

凡て物を見るとき〻何の用たることを考へ又其形を能く記臆すべし物を見るとても其用を考へず又記臆せざる人〻終身事を識ること能〻ざるものなり

第八



此圖〻春日の景色なり禽鳥は晴空に舞ひ蜂蝶は芳草に戯れたり

木〻嫩茅を生じ草〻新葉を發し看るとして緑ならざるなし總て天生の物〻春に至れば美しき衣裳を着くるか如し

人の少年〻一生中の春時なれば才能の種子を蒔くときなり

少年の時〻精神も充滿し年數も未遠ければ勉學びて生涯の安樂を冀望すべし

少年の時に勉め學ばざるもの〻一年の春時に種子を蒔かざると同じく生涯智識を開くことなし

斯る少年等〻縱令富貴の家に生まるとも遂に〻必貧窮とならん

今世上に富貴なる人と貧賤なる人とあり其智識と行狀とを見れば富貴なる人は智識も開けて行狀も亦正しこれ皆少年のとき能く勉め學びたるものなり又貧賤なる人〻智識もなく行狀も亦正しからずこれ皆少年のとき勉學ばざるゆゑなり

されば人々幼少のときより師の教示に從事して一身一家を立つることを學ぶべし

師傅〻父母に替りて兒童〻訓誡し善道に進むことを教ふるものにて我身に善教と學術とを授けて我資益をなすに由り父母に等しく尊敬して其恩を忘るべからず

第九

人ハ萬物の靈なれば禽獸蟲魚と異にして能く眞直に立ちて歩行す獸ハ能く物を見香を嗅き聲を聞き食を味ふるハ人と同じと雖其歩行するにハ立つこと能ハず又聲を發すれども言を出たして語ることを得ず人ハ能く言を出だして意中を語ることを得又能く諸物を推考して物理を解す是其異なる所なり

それこの世界ハ全く人の住居する爲に神の造りたるものにて世界ハ即人の住所なり

既に人の爲に此世界を造り日あり月ありて物を照らしまた其目を歡ばしむるにハ地上に芳草を生じ梢頭に美花を開かしむ」

人ハ食物を須ひるものゆゑに田野に於て穀物を與へ山林に於て鳥獸を與へ河海に於て魚類を與ふ

人ハ衣服を須むるゆゑに本綿と蠶を生せしめ或ハ野獸の背に長き毛を生じて衣裳を製ることを得しむ

人ハ家屋を造り又諸の器械を須むるゆゑに地中より銅錢などを出だしてこれを造らしむ凡て人の闕くべからざる物ハ一として與へざることなし

人もし好音を好むときハ鳥これが爲に歌ひ芳香を好むときハ花これが爲に薫じ暑日にハ雷雨あり炎熱これが爲に去り寒天にハ薪木あり燒きて以て煖を取るべしこれ皆神の賜ものにして所としてこれ有らざるハなし凡此地上及河海の萬物ハ禽獸蟲魚山林草木の花實に至るまで皆人を養ふか爲に神の與へたるものなり」

神既に此諸物を人に與へて足らざるものなからしむ故に人々愼みて神の賜ものを受け我身の生活を計るべし

然れども惡心惡行の人ハ此賜ものを愛くること能ハずして生涯貧窮なれば其安樂を願ハんにハ必勉めて善を行ふべし

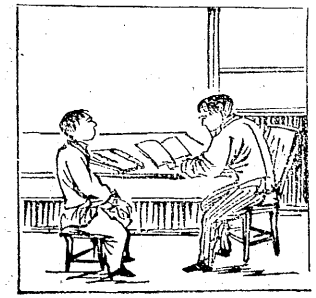
第十

爰に二人の童子あり一人ハ手に書を持ちてこれを讀めり此童子ハ勉强して能く書を讀むと見へたり

其書ハ久しく用ゐたるものなれども猶新き物の如し因りて此童子ハ怠惰ならずして又書を大切にすることを知れり

彼ハ日々學校に行きて小學讀本を學ひ習ひ得たる所の章ハ能く諳誦して忘るゝことなかるべし

今一人の童子ハ怠惰のものと見ゆたり何如にとなれば彼が持ちたる書ハ悉汚れまた所々裂け破れたるゆゑなり



此童子ハ勞して書を讀むと雖忘れたる處數箇條なれば通して讀むこと能はず彼は固り書を好まざるゆゑにかく學びたる所を多く忘るゝなり

汝ハ彼の顏色を見て書を好まざることを知れりや○彼の顏色ハ怠惰なるを表せり彼もし善良にして能く書を讀むことを好まば其顏色斯の如くに見ゆることなし

善良なる童子ハ斯る顏色とハ異にして必聰敏に見ゆるものなり

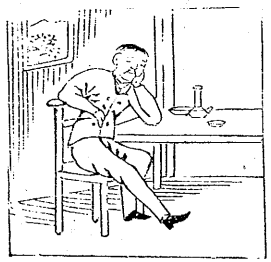
彼ハ能く心を用ゐざるゆゑに其書も破き汚れたり斯る懶惰のものハ遂に困窮卑賤の身となるべければ尤誡むべきことならずや

第十一

昔時一人の怠惰なるものありて常に職業をなさず今これを次の圖に示せり

此ものハ幼稚のときより怠惰なるものにて物事に勉强することなく

己れが職たる業を爲すこと能ハず畫ハ徒に坐するか或ハ唯眠るのみ
彼壯年に至りても猶小時の怠惰を改むること能ハず故に其家貧にして衣裳も帽も甚古びたり
彼も好き衣裳を好まざるにハあらざれども金なくして何如にぞ好き衣裳を買ふことを得んや又其業を務めずして何如にぞ金を得べけんや
彼ハ家に妻あり○其妻ハ何如なる衣裳を着たりと思ふや必破れたる衣裳を着たるなるべし」
彼も時として少しの金を得ることありされども此金を以て衣裳などを買ふことなく卽時に其金を無益に費せり今その狀を次に說示すべし



第十二

此圖ハ卽前の怠惰ものにして今日少しの金を得たりされども平生酒

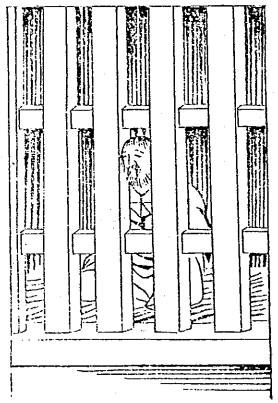
を好むの癖あるゆゑに己れの家に歸らずして直に酒店に行きたり
彼は甚大酒にして得たる金の盡るまでハ酒を止むることなし
彼十分に酒を飲むときハ其心狂亂して暴行をなし或ハ路傍に倒れて前後も知らず眠ることあり
是故に時として少しの金を得ることあれども飲酒の爲にこれを失ひて衣裳等を求むることを得ず
此怠惰と飲酒とハ極めて惡事にしてこれより多くの惡業を生ず凡て人ハ大飲すれば翌日身體勞れて職業をなすこと能ハず職業をなさざれば金を得ることなし金を得ることなければ我日用の品に乏しくして萬事不自由なり故に或ハ惡しき道にても金を得んことを願ひ屢人を欺くに至るものなり○されば平生戒むべきハ怠惰と飲酒なり

第十三

既に前に示したる怠惰人ハ飲酒すること益〻止まずして毫も職業をなすことなし稀にハ職業をなさんと思ふ心の生ずることもあれども幼少より懶惰に慣たる身ゆゑに其身をも我心に從ハしむること能ハずして日々慢遊を事とし一錢をも得ることなし

然れども飲酒の心を止むることを得ず何如にもして金を得て飲酒せんと思ふ一念增長して終に惡意を生じ夜々近傍の家に忍入り金銀を盜取りて飲酒の料となせり

斯る惡業をなして發露せざること無ければ遂に捕ハれて獄中に繫がれたり



此人ハ斯く獄中に入りて蓐の上に居るを以て今日に至りてハまた一滴の酒をも得ること能ハずして只一人暗き處に坐し絶て心ハ慰むるものなし

既に惡事を犯したれば今更悔悟すといへども身を救ふの術なくして終に獄中に死せり

家にハ妻と小兒あり其妻ハ何如にして身を養ひ又小兒を育つるや其次第ハ次條に說示すべし

第十四

此獄中に死したる人の妻ハ貧き家にありて小兒を育てんとすれども かねて一錢の貯蓄もなく又其夫ハ惡事をなして獄中に死する程の者なれば村里の人々これを憐み助くるものなし此故に妻ハ他人の衣裝などを洗ひ僅に其日の活計をなせども素より次のことゆゑ多分の金を得ること能ハず動もすれば其小兒を餓ゑしむることあるを如何に

ともをべきやうなく日夜悲歎して居たりしが終にハ其家にも住み難くなりて小兒を携へ故郷を立ち去れり

それ酒ハ能く人を昏迷せしめ亦人を狂亂せしむ○人の困難するも人の悲歎するも人の爭論するも又無益の言を出だすも道理なき事を行ふも皆酒のなさしむる惡業なり

第十五

此圖ハ田舍の景色なりいま畠より穀物を積みたる車を挽きて歸り家の門に入らんとす

汝ハ此穀物を何なりと思ふや○これハ小麥なり此穀物ハ日に乾かし穗を

打ち落し實と藁とを別つ○其のち磨にてこれを挽き小麥粉と爲し各家に貯ふ

此小麥粉ハ饂飩索麵等を製するに用ゐるものなり

麥の種類ハ小麥裸麥大麥あり是等と稻豆稗粟等を悉穀物といふ穀物ハ皆動物の食と爲して身の養となるものなり

第十六

爰に一人の男あり其子兄弟二人を集めて種々の珍しき話を聞かしむ父曰子前年此世界を一週せしとき數多の國々に到り種々の物を見たり一度甚しき寒國に到ることありしが三個月の間日光を見ることなく其間ハ常に夜なり此國の住民ハ雪又ハ氷を以て家を造り人ハ皆其内に住めり○兄弟曰斯る國ハ何處にありや○父曰此國ハ地球の南極と北極とに近き處にあり

父曰子其國に於て一の高山を見たり其頂上ハ甚高くして甚寒し頂上

にある雪ハたゞて融くることなし八もし此山に登るときハ其頂上に達せざる前に凍死す○兄弟曰大陽ハ何ゆゑに其雪を融かさゞるや又其處に夏ハあらざるや○父曰其國ハ夏といへども我國の寒中より尚寒し又頂より火を噴き出だす高山ありて噴き出つる烟ハ恰も烟筒の烟のごとし予其烟を見しに我家の烟筒を集めて一萬以上に至らざればかゝる烟ハ出でざるべしと思へり

此父の話ハ甚大なることなれども決して虚言にあらず眞實の話なり

父又曰予大海を渡るとき漁師の捕へたる鯨を見たり此鯨ハ殊に大なるものにして長さ凡十間餘ありて體の高さ三間餘あり數多の漁師ハ鯨の脇腹に穴を穿ち腹中に入り桶を攜ひて其膏を汲み出だせり其他大なる獸類を數多見たりと云へり兄弟の兒ハ喜びて父の話を聽き居たり

凡て小兒ハ謹て父母の話を聽くべし

それ父母の言ハ我身に益ありて智識を增し道理に適ふものなれば子たるものハ柔順にして其教に順ふべしこれ身を立つるの基なり

父母ハ我を育てゝ年も長じ智慧も優れたれば其教に順ふことハもとよりにて親の訓誡ハ國の制律と同じく敬み畏れて假にもこれに背くべからず

第十七

一女兒池上に小き舟を浮べたり其舟の帆ハ只一張なり女兒ハ此舟に結付けたる長き紐を操れりこれ舟の遠く流るゝとも失ハざる爲なり

此女兒の浮べたる舟ハ一本の檣あるゆゑにこれをスルーップと云ふ

凡て舟の檣ハ帆を帳り風を受けて舟を行るものなり大海に浮ぶる大船も同じ理なり又一男兒も小き舟を持ちてこれを池上に浮べんとす

此舟ハ二本の檣ありこれをスクーナルと云ふもし三本の檣あるときハこれをシップと云ふなり

凡て斯の如き舟を帆前船といふ帆を張りて行るゆゑなり帆ハ麻の厚き織物にて造るなり

船中にて人のはたらく處を甲板といふ○船の首を艦といひ船の後を舳といひ右の舷を面楫といひ左の舷を取楫といふ○船後に突き出で、水中に入りたるものを舵といふ舵ハ船の行くべき方角を定むるものなり

第十八

神ハ此地球を造り人民の生活する爲に用ゐる物をば皆此地球上に生せしむれハ人々其道を盡してこれを求むるときハ何物にても得ざることなし然れども人々の善惡と勤怠とに因りて物を得ると得ざるとあり且又人の務に從ひ物を得るに差等あり

今遊戯にのみ耽りて少しも心を他事に用ゐざれば此地球ハ徒に遊戯の場所となるのみ又財を蓄るにのみ勞して心を他事に用ゐざれば此地球ハ只財を積むの場所となるのみ

もし風車等の機關を設けて世間に利あることを計るときハこの地球ハ種々の機關を設くべき場所となれり

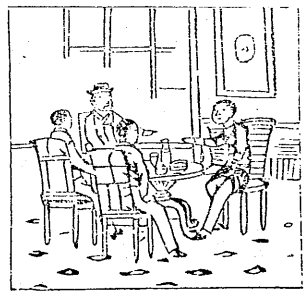
人々能く心を用いて世間に利あることを計るべし世間に利ある時ハ亦必我身に利あるものなり此の如きときハ此地球を生じたる神慮にも合ふといふべし」

今この國に書けるハ富人多くの貨幣を出だして衆人に示すに衆人これをみて大に感じたる所なり蓋此輩ハ斯る多くの貨幣を得たることなきゆゑなり

此富人ハ嘗て學校に入り多年の間勉强して百般の學術を覺ゑ先きに種々の機關を發明し大に世上に利益あることを工夫し今亦其身も大利を得て斯る富人となりたるなり

富人衆人に告げて曰夫この地球ハ大活物にして勉むれば必其報あらざることなし人能く勉めて世に益あることを工夫するに苦勞する時ハ其報も必大にして利を得ること多きものなり

もし骨折れざる業を爲し或ハ只一身に利あることを勉むれば其報必小にして利を得ることも亦少し予も多年の間刻苦して纔に利を得たれども今に至りて猶無益に時を費やすことなく亦無益に財を費やすことなし固自勉て得たる貨なれハ皆我有にしてこれを費やすも隨意なりと雖無益に費やすハ正道にあらず若美服を以て人に驕り又僅



の貨幣を得るときハ心に意を生ずるハ實に愚にして且不善なり

貨幣の最要用なるハ衣服食糧を購ひ或ハこれを貧人に與へて其饑餓凍餒を救ふにあり

貨幣を得てこれを惜み貯へ世間の用に供へず又貧人にも與ふることなく又我富を以て他人に驕るなどハ愚にして吝なるものなり人も必これを憎み神も必これを罰せん

それ貨幣ハ用ゐる道に由り善きものとなり又惡きものとなる故に道の當否に從ひ利害ともに此貨より起るものなり

故に怠惰にして貧賤なるハ實に恥づべきことなれども貨のみを愛着するも害の根原なり人々出精して其業を勉め其富を計るべし既に富めるに至らばこれを世間の用に供へて貧人を救ふを第一とすべし

第十九

平生關わす業を勉むるハ樂しからず又關わす遊戯を事とするも樂し

からず故に就業の時間ハ出精して業を勵み然る後に出遊する時ハその樂を覺ゆるものなり

就業中に出精せざるときハ其心に恥を懷きて快からず行の善良なるハ心の快さを得る良法なり怠惰なるものハ心の快きことなく何となれば其行狀の不善なるゆゑに恥づる所あればなり

一事を成さんとせば必其心を放つことなく一時にこれを爲べし成事業多くして力に餘ることありとも怠慢なくこれを勉むれば必其効ありて能く成就す故に勉むれば何事も易く勉めざれば何事も難し

書を讀まんとするときにハ如何に難き所にてもこれを止めず勉强して得る所あるにあらざれば他事を爲ことなかれ縱令力に餘る箇條にても餘念なく勉强するときハこれを理會せらるゝものなり

苦なければ樂あらず勉强の後に非ざれば遊步も樂あらず故に書を讀む時ハ其文を理解して後に遊步すべし業をなすときハ其業を成就したる後に休息すべし然るときハ心に恥づることなきを以て遊步も身の攝生となるものなり」

抑恥ハ人心に於て感動の大なるものなり恥を知るときハ人々怠慢放肆なることなし平生事を行ひ業を勉むるに方りて我心に恥づることなからんことを欲するハ身を守るの要務なり今業を勉めて就らず書を學びて通せざるハ大なる恥なりもしこの恥を知りて出精勉强するときハ業の就らざることなく書の通せざることなし

人の世に生れ來しハ天工を助けて國用を資るものなるに何等の業も勉めず國家の益をなさざるものハ自禍を招きて困窮に陷るべし此等ハ天に恥ぢ人に恥ぢ又我心に恥づること大なり

神ハ妄に幸福を與へず人をして自これを取らしむるものなれば唯恥を知りて能く勉强する者のみ幸福を得恥を知らざるものハ幸福を得ることと能ハざるものと知るべし

第二十

禮ハ教化の本にして人民の惡念を止め善心を開き人道を離れしめざるものなれば須臾も違ふべからざるものなり

人性ハ本善なるを以て辭讓の心を有せざるものなし然れども人欲の私に由りて本然の性を失ひ遂に放肆遊惰のものとなるなり

人々幼稚の時より人欲の私に克ちて本然の性に復るべし父母に事ふるときハ孝養なるべく長上に事ふるときハ恭順なるべし兄弟の友愛も朋友の信義も親族の睦和も皆禮より生ずるものゆゑに禮ハ身を立るの本なりと知るべし貪欲の念を肆にすることなかれ忿怒の心を縱にすることなかれ貪欲の念また忿怒の心あるときハ事を行ひ業を務むるに當りて正路を得ること能ハざるものなり

それ貪欲ハ私情の惑にして此念を肆にするときハ遂に殘暴の行をなすに至る又忿怒ハ一時の狂疾にして此心を抑へさるときハ遂に爭鬪

の端ハ開くに至る必竟ハ皆幼稚のときより辭讓の心を失ふによれり

古語に謙ハ益を受く滿ハ損を招くといへり終日業を務むれば心中に爽快を覺ゑ今日遊怠なれば翌日繁忙の愁あり古語にまた終身道を讓るとも百歩を枉げず終身畔を讓るとも一段を失ハずといへり是禮讓の得ありて損なきを諭せるものなり

第二十一

昔一人の童子あり天性至孝にして善く其母に事へ毫も其命に違ふことなし母事を命ずる毎に直に立ちてこれを行ひ常に怠かず

母嘗て紡絲を繰りて絲環に紆ふことあり其子に命して紡絲を手に掛けしむ童子ハ絲を紆ふるの間過ちてこれを紛亂し解けざるゆゑ急にこれを解かんとするに却りて緒を失へり

童子既にして一の緒を求め得たるゆゑに頻にこれを引けゝ益固結して復解くべからざるに至る因りて更に狼狽して一緒を斷せり母これを止めて曰汝過れり此の如くする時ゝ適に其紛亂を益すのみ暫汝が心を靜め思を平にして正き緒を求むべし既に正き緒を得れば亂れたる絲ゝ自解くるものなりと

母又童子に告げて曰夫人世の業を務むるゝ猶亂れたる絲を理むるが如し是に監み宜しく汝の終身を計るべし世に處し事に臨みて苟私欲忿怒に惑ひ已の血氣を抑へざれば縱令苦心焦思して其力を盡すとも徒に勞して功なきのみと

小學讀本卷之三終

文部省御藏版書類　活版摺小本陸續發賣仕候間御購求ヲ乞フ

明治十一年二月十八日飜刻御屆
同　年四月出版

定價金六錢

飜刻出版人　大阪府平民　柳原喜兵衛
第一大區七小區北久太良町四丁目十四番地

賣捌所　讃州金昆羅小坂町　沼田仲助
防州德山　淺田孫兵衛
豫州八幡濱田中町　兵頭伊三郎

印刷　大坂安土町四丁目　柳原活版所